

インターネット時代の論文

昨年、我が家に韓国からの留学生がホームステイした。教育大学に学ぶ彼によると、韓国では、小学校の高学年からコンピュータが必修科目で、有名高校の受験科目にも、国語、数学、英語と並んで出題されるそうだ。したがって、学習塾の教科にもすでにコンピュータが登場しているという。現役の教員でもある彼の家庭にも、インターネットにつながったパソコンがあり、子供が勉強に利用している。

韓国に限らず、私が実際に在外での仕事を通じて体験したアジア各国のパソコン事情も、すでに日本を超える勢いだ。フィリピンでも、タイでも、もちろん情報インフラの先進国シンガポールや、世界最大のパソコン生産国台湾でも、多くのオフィスで当たり前の情報機器としてパソコンが利用されている。そして、情報処理関係の教育が進んでいるところを垣間見ると、もう数年後には、日本の多くの産業界が太刀打ちできなくなるだろうと、確信したものである。

日本は、英語教育の失敗と、世界で唯一、ワープロ専用機という奇妙な「機械」が広まってしまった悪影響もあって、パソコンの普及が遅れてしまった。しかし、インターネットが世界の壁を壊し、あらゆる産業の生産性を革命的に変えつつある中で、ようやく日本でも、コンピュータ情報処理が「必修科目」になりそうである。

私たち研究者の中にも、若い人を中心に、正常な情報処理能力を身につけた人材が少しずつ増えてきた。これからは、私達の職場でも、情報インフラを当たり前のよう利用できる環境を整え、生産性を無駄に落とすことのないようにしてやりたい。

ところが、インフラ整備よりも、もっと大切な問題がある。論文の作成方法が、インターネット時代に対応していないのである。

えっ。インターネット時代に対応した論文の作成？

この質問には、次のような例を想像してもらおう。もちろん、インターネットは、単なるインフラ。これをどう使うかは無限で、以下の例はほんの一部にすぎない。

★論文そのものを、インターネット、イントラネット上で作成していく

グループウェアでデータを共有し、共同論文を同時執筆できるので、複数の研究者、もちろん世界のどこにいてもいい研究者が、同時に同じ論文を執筆でき（単に共同研究者として名を連ねたり、査読をするのとは意味が違う）、格段に研究スピードが上がる。研究機関のボーダレス化が進む。

★印刷物によらない研究成果の公表

研究は、通常、終わりのない作業である。論文（研究成果）は、本来、時間とともに変化する。印刷物による研究発表でも、時間に関するバージョンを刻むことができるが、成果の取りまとめから発行までに、相当の時間を必要とする。インターネット上では、論文を書いた瞬間が、発行時間だ。そして、常に最新バージョンの研究成果を公表できる。もちろん、古いバージョンを残すことも自由、限られた人にだけ公表することも自由だ。

★マルチメディアを利用した表現

映像、音声、バーチャルリアリティーによる論文成果の公表も、印刷物にはできない方法だ。読む人にとっては、文字や図表に加えて、実際に論文の作者と同じようにシミュレーションができるのである。

上記の例は、将来の話ではない。今すぐに、できることなのだ。相変わらず従来どおりの論文作成方式で甘んじている現状を何とかしなければ……

（記 馬場仁志）

表紙右上記号 ISSN 0914-8159の説明

ISSNは、International Standard Serial Number（国際標準逐次刊行物番号）の略で、逐次刊行物に付与される国際的なコード番号で、ISSD（国際逐次刊行物データシステム）という組織のもとで逐次刊行物の組織や検索に利用されます。

この番号は、国立国会図書館ISSD日本センターより割り当てられたものです。